

播種期の差による品種の出穂反応(第2報)

本村 弘美・小野 敏忠
(九州農業試験場)

水田の稲麦二毛作に必要な水稻品種の晩植適応性について、その重要形質である出穂特性を明らかにし、晩植適応性品種育成の参考資料にする。

1 試験方法

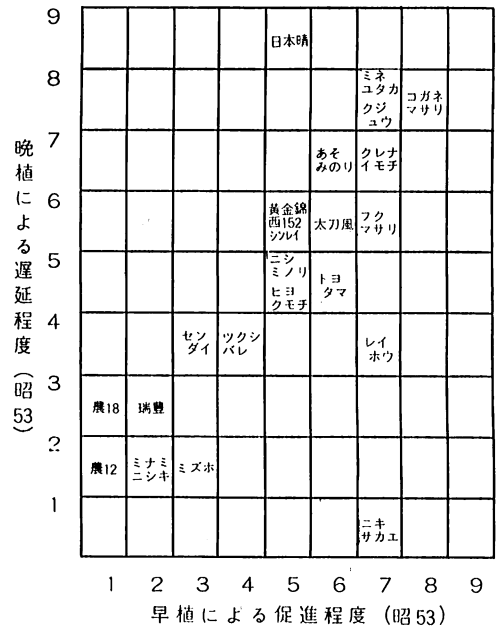
主に九州地方の系統および品種を48用いた。本田は1区4㎡2区制とし、試験方法は前年度と同様に3移植期を取り、播種・挿苗期以外の耕種法は標準栽培に準じた。

2 試験結果及び考察

成績の概要は前年度と同様な傾向が認められ、その主な品種については第1～2図に示した。

晩植栽培による出穂期の年次相関はかなり高い。一方九州地方の出穂期の安全限界を9月12日頃と考え、晩植区でそれに該当する品種は前年度と同様、あそみのり・太刀風などで、この熟期群までが晩植条件で安全であることが明らかになった。(第1図)

晩植による遅延程度と早植による促進程度をみると、遅延・促進程度とも大きいのは早生群で、その小さい



第2図 晩植による遅延程度と早植による促進程度との関係

のは早生群となる傾向があるが、それぞれの熟期群の品種間にはその程度に差がある。(第2図)

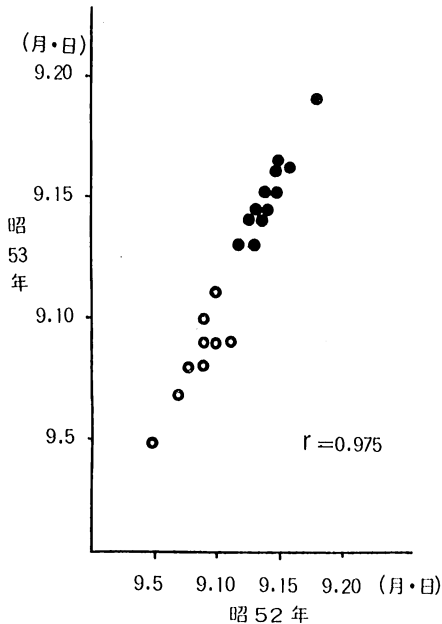
晩植による遅延程度と晩植短日区の生育日数との関係では、遅延大きく、生育日数が小さいものは早生群の品種が多く、遅延小さく、生育日数の大きいものは晩生群の品種が多く含まれる傾向がある。

暖地の晩植適応性からみると、短日区の生育日数の割に遅延程度の少ないものが望ましいように考えられる。

晩植による遅延程度と短日処理による促進程度との関係では、遅延程度の大いものは促進程度が小さい、晩植による促進の小さいものは促進程度が大い傾向が認められ、前者には早生群が多く、後者には晩生群が多く含まれているが、ニキサカエは特異的な反応を示した。

3 参考文献

- 1) 松尾孝嶺: 栽培稲に関する植生態学的研究, 農技研報, D 3, 1~111 (1952).
- 2) 朝隈純隆: 日本型水稻の出穂に関する生態的研究, 鹿児島県試報告, 49~70 (1970).
- 3) 本村弘美: 小野敏忠: 三好芳彦, 播種期の差による品種の出穂反応, 九州農業研究, 41, 25 (1979).



注: ○印は9月12日以前に出穂したもの
第1図 晩植区の出穂期